

明治ホールディングスには自浄能力は無いのか

株主総会で明らかになった「企業の社会的責任」の放棄

第一回・明治ホールディングス株主総会が行なわれる

6月29日に行なわれた第一期明治ホールディングス株式会社の株主総会に、明治乳業争議支援共闘会議、明治乳業争議団は、それぞれ一人の株主として企業の健全な発展を求める立場から連名で事前質問書を提出していました。

しかし、明治ホールディングスはまったく誠意のない回答に終始するばかりか、強引な総会運営に議場が混乱、怒号が飛び交い、株主からの質問を一方的に無視し、終了を宣言。役員は会場から逃げるように退場しました。

事前質問書は真摯に明治ホールディングスの発展を願うもの！

事前質問書は、「明治ホールディングスが健全な企業活動を土台に国際的な飛躍を果たすためにも」として次のことを求めています。

第一は、「安全・安心」を求める消費者の期待に応える健全な企業活動を誠実に行なうこと。

第二は、子会社「明治乳業」の異常な企業体質の象徴となっている労働争議の全面解決に向け、親会社「明治ホー

ルディングス」の責任で解決交渉の場を直ちに設定すること。第三は、引き続き危機的状況にある国内酪農を守り、企業活動の基盤を支えるパートナーとして育成するためにも、「乳価引き上げ」など酪農家の切実な要望に対応すること。

以上の観点から二十二項目の質問に回答を求めています。



回答は真実に背を向け、都合の良いところを一方的に主張するもの！

現在、子会社「明治乳業」の労働争議は、25年が経過した市川工場事件と16年目の全国事件があります。

先行した市川事件では、東京高裁は

明治乳業の不当労働行為意思による

「有意な

格差」を

判事・事実認定し

ているの

ですが、

高裁は

「時効

(除斥期間)」を持ち出して、救済命令を出さなかっただけです。

会社の回答は、こうした事実認定を無かったこととして一方的に最高裁の「上告棄却」を繰り返したに過ぎません。最高裁は会社が「正しかった」などと決して述べているものではありません。

また、酪農を守る立場からの「乳価」問題でも、生産者の立場たつて考える視点がまったくなく、「儲かれば何でもあり」の傲慢な企業姿勢の形式的な回答に、「これじゃー、会社は消費者からも見放される」など、会社の先行きを疑問視する声が会場から聞かれました。



なぜ起きるのか明治乳業で 連続する死亡災害

儲かればなんでもありの
企業体質に「命の重さ」は分からない

今年の5月9日、明治乳業関東工場で、二一才の臨時女性従業員が犠牲となる死亡災害(昇降機に挟まれ)が発生しました。

また、この2月にも子会社(明治ロジテック)で、女性労働者の死亡災害(リフトと壁の間に挟まれ)があったばかりです。

過去には、守谷工場、京都工場、稚内工場、市川工場、神奈川工場と「これでも生命と健康を育む食品企

業なのか」と疑わざるを得ないほど死亡災害が繰り返されています。

先般の明治ホールディングスの第一回株主総会では、株主の質問に田中取締役は、「300名を超える従業員が不通や、告別式に参加した。」

「遺族には真摯に対応している」「ご遺族に哀悼の意をささげています」と答弁しました。

しかし、失われた命は二度と帰ってきません。

安全・安心な職場は、労働
争議の解決から生まれます

職場の中で「ものが言えない」労務管理の下では、同じような災害が必ず起きると私たちは会社に何度も指摘し、改善を求めてきたにも関わらず明治乳業はそうした声を無視し、改善を求める労働者を不当なイジメや、差別、人権侵害を長年に渡って

行なってきたのです。それが25年も続く現在の労働争議です。職場の中で働く多くの労働者は25年にも及ぶ争議の成り行きをじつと見守っているのです。「コンプライアンス委員会」を立ち上げたからといって労働者から「素直な意見」が発せられる労務管理に無いのです。イジメが待っているからです。会社が信頼できないのです。

会社が本場に「労働災害の撲滅に取り組むのなら」、「健全な企業運営を求めるのなら」、一日も早い争議解決を図るべきです。

それが、いま一生懸命に働く従業員の信頼につながり、これまで労働災害で犠牲となった人たちへの最大の「哀悼の意」ではないでしょうか。



私たちは厳しく要求します！

- ◎ 遺族に対して誠意をもって対応し、完全な補償を行うこと
- ◎ 事故の原因を徹底究明し、内容は全て、速やかに明らかにすること
- ◎ 全社的に緊急職場点検を行い、安全対策、教育実習、現場の声に基づく人員配置の見直し等を行うこと

